

「出題の意図」

選抜区分	2026年度（選抜区分：一般選抜 前期日程） 文学部 比較文化学科（科目名：総合問題）
<p>問題Ⅰ（英文読解）</p> <p>前期日程の英文読解問題は、自然な英語表現で書かれたエッセイから一部を抜粋して出題し、細かな読みと大まかな読みの双方ができるか、それを分かりやすく伝えられるかといった総合的な能力を問うものである。エッセイの中で使われる文法・語彙の多くは高校までに習得したレベルに抑えられているが、多少、難易度の高いものが含まれる場合もある。これには、わからない単語が出てきても類推して把握できる能力があるかを問う狙いがあるため、逐次訳のような正確さよりも、文章全体の意図を汲んで訳しているものを高く評価する。また、指示語の内容を具体的に明らかにしながら、理解したものを他者に分かりやすく的確に伝えている解答を高く評価する。日頃から600～800語前後のエッセイを読み、大まかな流れを把握できる能力と、それを他者に伝える表現力を磨いておいて欲しい。</p> <p>問題Ⅱ（和文英訳）</p> <p>和文英訳問題は、下線部の内容を機械的に英語に訳すのではなく、文脈を理解したうえで適切な表現に置き換えられているかを問うものである。高校までに習得した文法・語彙を正しく運用する英文構成能力や発想力があるかどうかを試している。</p> <p>問題Ⅲ</p> <p>菊地昌典『歴史小説とは何か』（1979年）は、歴史家と小説家の違いについて考察し、小説にもその時代の人間を忠実に再現しようとする歴史小説と、舞台は過去でも登場人物はあくまで現在の人間である借景小説とがあることを指摘する。日本近代文学の研究者であればまず知っているとされる名著の一つである。設問では、本作の全体の流れ・展開を理解できているか、細部を丁寧におさえられているか、理解したことを的確に伝えることができているかを問うた。</p> <p>問一 問題本文の前半、歴史家が人間を歴史に登場させることの困難であることについて、理由が述べられている。史料を客観的に扱えないこと、心理学の応用では対象者の心理をつかみとることは至難であること、基礎データを死者から得ることが極めて困難であること、心理に影響を与える時代相を考察するための基礎データが不足していること、以上から人間を歴史に登場させるのは至難の業と考えていることを、採点者に分かりやすく伝えている解答を高く評価する。</p> <p>問二 問題本文の後半、歴史に関わる森鷗外の小説と菊池寛の小説との違いについて述べられている。森鷗外は、ある時代相におけるある人間の現代人には理解しがたい心理に忠実であり、人間を動かす捉えがたい時代相をもリアルにえぐってみせているとされている。それに対し菊池寛は、現代人によるその心理の過去への適用であるが故にリアリティはないが、「実生活にピッタリと奉仕する生活的価値」に力点をおいた小説を書いていると述べられている。以上の違いを的確に捉え、伝えることができている解答を高く評価する。</p>	

問題IV

問一 漢字の書き取り問題。日常的に用いられる漢字を正確に書くことができるかを問うた。

問二 小説等で用いられる語句を出題し、適切に使うことができるかを問うた。

問三 日常的には用いられないものの、評論等では出てくる言葉の基本的な意味を理解できているかを問うた。